

茅野 信行 提出 学位申請論文

『東西冷戦終結後の世界穀物市場』 審査要旨

本論文の位置づけ

1989年末に東西冷戦構造が消滅し、91年にソビエト連邦が崩壊した。その後の30年の間に世界の穀物市場はその姿を大きく変えた。まず、遺伝子組み換え（GM）種子が普及し、次にトウモロコシからエタノールが生産されるようになり、トウモロコシの使用量が急増した。また、恒常的な穀物輸入国だった旧ソ連が小麦輸出国に変わった。さらに、中国が大豆の輸出国から大輸入国に変貌した。一方、地球人口は2012年に70億の大台に乗った。今後、食料需要はさらに増加することが考えられる。本論文はこれらの構造変化を踏まえ、「これから先、穀物価格はさらに値上がりするのか」、「宇宙船『地球号』は増加する人口を養うことができるのか」といった大きな課題に取り組んだものである。

本論文は1990年代以降の世界の穀物市場を多面的な角度から総合的に分析している。言うまでもなく、穀物市場の動向は人類の生存に直接に関わるばかりでなく、世界の金融市場や物価動向および地球環境問題など多方面に大きな影響を及ぼす。よって、その分析には経済理論的な側面と同時に、めまぐるしく変化する需給の読みと市況の動向、各国政府の戦略、巨大穀物企業（以下、本報告書では「穀物メジャー」という）の思惑、気象・天候条件、穀物エタノールなど新しい

エネルギーに対する技術的側面などきわめて多方面からの洞察が必要とされる。本論文はこうした多岐にわたる論点を幅広い視角から検討し、総合的に考察している。

分析の視角としては、在庫率（stock to use ratio）の推移に着目している。在庫率とは期末在庫を総需要で割った値である。著者によれば「需給実態を明らかにするのにこれくらい適切な指標はない。なぜなら在庫率は需要と供給の全要素を集計して期末在庫を導き出し、それを総需要で割った数値」であるからだ。この意味で本論文の分析は価格メカニズムに信頼を置いており、穀物価格の高騰は既存の需要の代替品への切り替えを促し、種子や栽培方法にイノベーションを起こす誘引となり、政治的に非効率な政策の撤廃を促すことになるという。

各章の要旨

本論文は8章で構成されており、大きく二つの部分に分かれる。第1章～第5章では、アメリカ、中国、EU、旧ソ連、南米の順に章を立て、東西冷戦終結以降の世界の穀物市場の構造的変化を、市場価格を指標にして分析している。第六章～第八章では、世界各地の農地取得ブームや、日本の商社の穀物流通への貢献、世界の穀物市場における米国の地位について詳述している。

第1章「穀物市場の新たな潮流」では、穀物超大国アメリカの地位

低下と穀物市場の主要プレーヤーである穀物メジャーの動向、および近年大きな話題となったトウモロコシなどによる燃料エタノールについて分析している。まず、ソ連崩壊以降の五回に及ぶ穀物価格の高騰が天候不順による減産を主要因とした在庫の逼迫によるものであることを示した。このとき重要なのは世界の在庫率よりもアメリカの在庫率であることに注意を促している。次に、90年代以降の穀物市場における新たな潮流である遺伝子組み換え（GM）種子の普及の背景が詳述される。また、一大ブームとなったトウモロコシを原料とするエタノールについて米国の農業政策および穀物メジャーの戦略と関連して議論が展開される。

第2章「世界最大の大豆輸入国へ躍進した中国」では、高度経済成長に伴って国民の食の嗜好が劇的に変化し、世界最大の穀物輸入国となった中国のインパクトが論じられる。21世紀に入ってから中国は世界最大の穀物輸入国となった。世界穀物市場史の文脈でとらえると、冷戦期には最大の穀物輸入国であったソ連の輸入がトウモロコシと小麦に集中していたのに対し、中国は大豆の輸入が圧倒的である。その理由は、中国で食肉需要が爆発的に増加し、飼料穀物の原料（大豆粕）としての大豆の需要も急増したからだ。中国の大豆需要のおかげで、アメリカ政府と穀物メジャーは、ソ連崩壊によって失った輸出市場を穴埋めすることができたのである。

第3章「欧州連合の共通農業政策」では、独特の農業保護政策をとるEUの戦略を分析している。欧州共同体は1967年から、共通農業政策の下で単一の共通市場を形成している。域内統一価格制度を導入し

て農家所得を保証するための価格支持を行ってきた。この政策によって農家の生産意欲は当然高まったが、次第に域内消費量を上回るようになり、在庫が積み上がった。これを解消するために域外への輸出を増加させたが、これと米国の利害が衝突し貿易戦争の状況を呈するに至った経緯を詳述している。

第4章「旧ソ連、小麦の大輸出国へ変貌」では、冷戦終了後の最大の変化である旧ソ連の輸出大国化の背景を探っている。21世紀に入ってからロシア、カザフスタン、ウクライナの旧ソ連三カ国が小麦の輸出大国に変貌することは大方の予想に反するものであり、その過程は謎の部分が多かった。ひとつの要因は穀物メジャーの参入によって穀物保管部門の生産性が飛躍的に高まったことである。輸出大国化シナリオはプーチンが書き、メドベージェフが実行したというのが筆者の見立てである。

第5章「穀物輸出基地となった南米」では、大農業国であるブラジルとアルゼンチンの動向を整理している。ブラジルは近年、大豆生産国として台頭している。その理由は、①広大で肥沃な農地が未開拓のまま残されていたこと、②GM種子の作付けが許可されたこと、③中国で大豆需要が急増したこと、④トウモロコシと比べて生産コストが低いこと、⑤国内の高い陸上交通費をまかなうには単価の高い大豆が有利であること、などである。一方、アルゼンチンの制限的な輸出政策には大きな問題があると指摘している。

第6章「海外での農地取得ブーム」では、世界的な農地獲得競争の功罪を論じている。新興国の経済成長と人口増加によって世界の穀物

需要は急増している。このため農地の不足が深刻になっている。2008年の原油価格と穀物価格が同時に高騰したことが引き金となって、中国、韓国、サウジアラビアなど穀物輸入国が世界各地で農地獲得競争に本格的に乗り出し始めた。しかし、筆者は穀物価格高騰に対応した方策としての海外での農地取得の効果については否定的である。

第7章「穀物流通に対する日本商社の貢献」は、総合商社の戦略を通して日本の穀物市場の問題点を浮き彫りにしている。1990年代半ばから穀物メジャーが日本から撤退するようになった。日本市場の成長が止まり、穀物市場としての重要性が低下したからである。一方、日本の商社はこれまで蓄積してきた穀物業界に関する専門知識を生かせば世界の主要市場でトレーダーとして活躍できると期待する。

第8章「穀物貿易はアメリカを主軸に展開」では、地位が低下してきたとはいえ、今後ともアメリカが世界の穀物貿易の中心であり、米国農務省の政策には常に注目しなければならないと説く。

論文審査の経緯（総論）

上記のように本論文は、冷戦後の世界穀物市場の大きな変化について、非常に幅の広い論点を扱うと同時に大きくグローバル経済を俯瞰する点にも特徴があり、類似する書物がほとんどないことから学術的に貴重な貢献をしていると考えられる。このように、本論文の包括的意義については審査委員の判断は共通した。しかし、論文の形式面お

よび学術性については審査委員の評価が割れる部分があり、これらの点について忌憚なく議論した。

2016年6月4日、主査と3人の副査から成る審査委員団は提出された論文および当日の学力試験（口頭試問）に基づき、公正かつ徹底的な議論を行った。

論文審査の経緯（各論）

1 本論文の学術性について

まず、本論文が学術論文として博士号に値するかどうか包括的に議論した。この点で本論文は純粋な学術論文とはややスタイルを異にするということで審査委員の認識は一致した。一部の委員から本論文の学術性に対して若干の疑義が示され、学術論文としてはさほど高く評価できないとの見解が示された。その主な理由と審議の経緯は以下の通りである。

- ① 本論文は多様な事象について多面的な記述がなされているが、経済学的分析が一貫してなされているとは必ずしも言えない。
- ② 方法論として仮説提示から証明へ進むという手続きが明確ではない。
- ③ 結論が推論にとどまっている部分がある。
- ④ 全体の基礎となる理論の枠組みが明示されていない。
- ⑤ 時事的問題の記述の中には、やむを得ないことではあるが、時

間の経過によって状況が変化している部分がある。

- ⑥ 各章がどのように連関しているのかわかりにくい。また、論文の構成として第一章で全体像を示し、終章で総括するというオーソドックスなスタイルを採ったほうがよかった。
- ⑦ 穀物業界の内部では常識となっていることでも一般向けに丁寧に説明すべき点がある。

2 本論文の表現・表記の問題について

次に形式面を議論した。本論文の元となった書籍（中央大学出版会刊行）の作り方に詰めが甘さが残るという点で審査委員は共通の認識を得た。その主な理由を列挙し、議論の経緯を示す。

- ① 通常の学術論文には見られない口語的表現が散見される。
- ② 注釈の付け方、引用の仕方が学術論文としては厳密性に欠ける部分がある。
- ③ 論文中に誤字が残っている。
- ④ 校正が不十分と思われる部分が散見される。

3 議論のポイント

上記の1と2で見たように、本論文は一般的な学術論文とはややスタイルを異にしており、形式面でも若干の瑕疵があるという点で審査委員の見解は一致した。一部の委員からは、「破格」の論文との認識も示された。

通常こうしたケースでは、学術性と形式整合性から判断して、提出

された論文に対して否定的な結論となる蓋然性が高いと思われる。しかし、本論文に関しては複数の委員から上述のネガティブな側面を上回るポジティブな意義があるとの指摘があった。次に本論文の肯定的側面について議論した。

4 肯定的に評価された内容的側面

- ① 全編に記述された具体的事例は、穀物トレーダーとして40年間、現場でビジネスをしてきた著者ならではの生き生きとした記述である。
- ② 一つ一つのエピソードが広い視野と大きな歴史的変化の文脈で説得的に解釈されている。
- ③ 冷戦後の穀物市場について、大きなパースペクティブで全世界に目配りしている。
- ④ アメリカ、中国、EU、旧ソ連、南米、日本という個別のプレイヤーの動向だけでなく、相互作用の解明にある程度成功している。
- ⑤ 穀物に関する実際の国際取引を行う者のみが有する現場感覚と分析に溢れている。理論面が弱いように見えるが、基本的には市場メカニズムの需給調整作用から説明がなされており問題はない。

5 社会的意義としての評価

引き続き本論文の独創性、斬新性、社会的意義について議論した。

次のような点で高い評価を得た。

- ① 国際穀物市場は、穀物メジャーが主導権を握る閉鎖的な市場である。この秘密のヴェールに覆われた市場に対して、その内的メカニズムに迫った日本語による包括的研究は初めてである。
- ② 業界の内側にいた人間にしか書けないリアリティがある。
- ③ この時期の国際穀物市場をテーマとした先行研究および類書がほとんど、あるいは全く存在しないという点で唯一無二の論文である。また、今後もこのテーマを業界の内側の視点を踏まえた形で書ける人物は現れにくい。

総合評価と結論

総合評価

たしかに、本論文は、通常の経済学の論文のように理論から演繹的に、あるいは計量分析を通じて結論を導くというスタイルとは異なる。このため、各章の結論がアドホックなものにとどまっているのではないかという懸念は否定できない。しかしながら、本論文の研究対象の多くが非公開企業である。また、外部からは目に見えない穀物メジャーの活動と、千変万化する国際穀物市場の分析においては、本論文のように一つ一つのエピソードを積み上げながらトータルな世界像の構築を目指すという手法は有効に機能していると判断される。

理論的側面が弱いという批判に対しては、本論文の価値は冷戦終結

後から現代に至るまでの「同時代的経済史」としての意義の中に見出されるべきであり、この場合は理論分析が必ずしも強く要請されるものではないと考えられる。

本論文は先行研究がほとんどない分野であり、本論文が本邦初の体系的考察である。しかも、今後も対象の特殊性から類似研究は現れにくいと思われる。1970年代から40年にわたって穀物トレーダーとして活動すると同時に、新聞や経済雑誌へ機動的な情勢分析を寄稿し、現実の穀物取引を通じて実業界でも業績をあげてきた著者ならではの独創的著作といってもよい。

総合的に評価すると、本論文の形式面には多少の瑕疵があり、手法としては正統的な経済論文のスタイルとは異なる点があることは認めなければならない。一方で、類書が存在せず、今後も現れるとは考えにくいことから、同時代の貴重な証言、あるいは穀物市場から見たグローバル・ヒストリーとしての価値は大きいと評価される。一部の委員からは、希少性という意味で後世に残る文献になる可能性があるとの指摘があり、大方の賛同を得た。

結論

審査の経緯は上記の通りである。本論文には形式面で若干の瑕疵があり、内容面では一般的な学術論文のスタイルとは異なるため、純粋なアカデミズムの観点からは学術性について弱点が含まれることは否

定できない。しかしながら、本論文の価値は、冷戦後の世界における穀物市場からみたグローバル経済史という未開拓の分野に踏み込み、非公開企業中心の閉鎖的な穀物メジャーと、欧米主導の国際穀物市場の同時代史をまとめ上げたリアリティと歴史的価値にあると判断される。

総合的に判断すると、本論文は学術性という観点からは未完成の部分を残すものの、それは研究対象固有の困難さに起因する部分が大きく、致命的な欠陥ではない。むしろ、本論文の価値は独自性、斬新性、希少性において高く評価されるべきである。

以上のような公正かつ率直な議論の結果、審査員4名は全員一致で本論文が論文博士の学位を授与されるに十分な内容を有しているとの結論に至った。

平成29年3月8日

主査	國學院大學教授	高橋克秀	㊞
副査	宮城大学教授	三石誠司	㊞
副査	農林水産省大臣官房国際部 国際情報分析官	成田喜一	㊞
副査	國學院大學教授	久保田裕子	㊞

茅野 信行 学力確認の結果の要旨

下記4名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試問を行った結果、
博士（経済学）の学位を授与される学力があることを確認した。

平成28年6月4日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	高橋克秀	㊞
副査	宮城大学教授	三石誠司	㊞
副査	農林水産省大臣官房国際部 国際情報分析官	成田喜一	㊞
副査	國學院大學教授	久保田裕子	㊞